

近世城下町における水系の設計論理に関する研究

A Study on the Principles of the Water System Design in Castle Town

○實方琢人¹, 阿部貴弘²
*Takuto Sanekata¹, Takahiro Abe²

Abstract: The early modern castle town had urban structures composing of waterways and streets. There are many studies on principles of urban design in castle towns. However, it has not been understood because of the lack of historical materials. In particular, the study on water systems in castle towns have not progressed. This study aims to understand the principles of the water system design in castle town.

1. はじめに

近世城下町は水路網と街路網が複雑に入り組んだ日本独自の都市構造を持っている。また、日本の県庁所在地 47 都市のうち近世城下町であった都市は 32 都市であり、日本の主要都市の多くが近世城下町を起源としている。

近年、我が国では都市計画、観光、社会教育においても都市の履歴への関心が高まっており、『都市再生整備計画事業』においても歴史が 1 つの要素とされているなど都市の履歴はまちづくりにおいて重要な役割を持っていると考えられる。

そうした都市の履歴についてはその設計論理を明らかにする研究を中心に多くの研究がされてきた。しかし、主に史料の不足等を要因として完全な解明には至っていない。中でも水系の設計論理については未解明のままであり、研究の余地があると考えられる¹⁾。

そこで、本研究では近世城下町の設計論理の解明に資するため、城下町の水系に着目し、複数城下町の比較分析に基づいて近世城下町の水系の設計論理を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

(1) 調査方法

各城下町の市史や文献史料の調査を行い、城下町の土地の特性や当時の土地利用等、分析に用いる情報を把握、整理する。また絵図や地図の収集も行い、これらも分析に用いる為にトレース等によって地図の簡略化を行う。

(2) 分析方法

各城下町における調査結果をもとに比較分析を行う。比較分析は主に各城下町の類似点や相違点に着目して行い、水系の設計論理を考察する。

3. 研究対象

本研究では江戸、大坂を含む 6 城下町を研究対象とする。また、その位置を **Figure 1** に示す。なお、本研究では比較分析を行うために、近世城下町の地形条件を加味して対象の選定を行った。

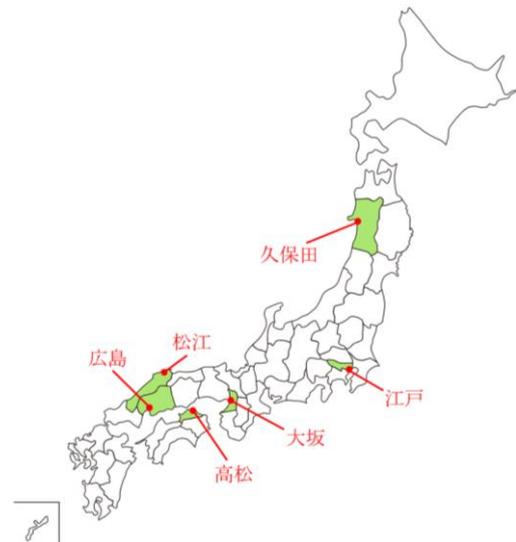


Figure 1. A Map of Survey Area

4. 結果及び考察

各城下町を調査した結果得られた情報を以下の **Table 1** に示す。

近世城下町の立地は、平野部であることが多いが、中でも城郭は微高地に位置し、山や河川に囲まれるなど防衛を意識した配置がされていた。更に各城下町の町人地の配置に着目すると、近世城下町の町人地は主要の街道だけではなく海や湖・堀川と水系の周りに多く配置されていることが確認できた。近世城下町では水運が活発であったことから商業の中心である町人地が水辺に配置されていたと考えることが出来る。特に大坂では町人地内に多くの水路が張り巡らされていることが確認できる。

1 : 日大理工・院 (前)・まち 2 : 日大理工・教員・まち

内濠は城下町において防衛の役割を持つ濠である。松江では山と山の間に存在していた丘陵地を崩して内濠を形成し、その土を築城に活用した例が見られた。このように、内濠に関しては防衛上有利な位置に城郭を設定したうえで大規模な地形改変も伴って内濠を開削するなど、それだけ防衛上で重要視されていたと考えられる。

外濠も内濠と同じく、防衛として重要な役割を持つ濠である。しかし、外濠は内濠と比べて自然地形を活用し、微低地、谷地に開削される傾向がある。また、外濠は城下町全体や町人地等の境界線としても活用され、舟運にも利用されていた。舟運に利用されるという特性上、場合によっては直接的に河川とも接続され、築城時の物資搬入に利用されるなど、外濠については非常に合理的に開削されていたと考えられる。このように外濠は開削位置は城下町の地形によって違いが見られ、役割については防衛の他、町人地との境界、舟運と幅広いものの、多くの城下町で共通していた。

他の堀川及び水路について、まず町人地内の水路の数に着目すると、久保田が最も少なくなっている。これについては立地が新たな開削の難しい内陸であることが理由にあげられる。そして、その他の城下町においても水系の発達には違いが見受けられるが、これは江戸や大坂の城下町の規模の他、町人地で取り扱う物資が陸路と水路どちらに適しているかも要因としてあげることが出来ると考えられる。

城下町の水路全体として見ると、広島においては河川から外濠、内濠と水を巡らせ、海にまで流れている。また、大坂及び松江の水路の配置を見ると、松江に関しては湖からではあるが、水を取り込んで堀を通して海まで巡らせるという広島での特徴と同じ特徴がこの2城下町にもいえると考えられる。このような上流から下流へと水を流す水路は近代における埋立の判断においても重要な事項であると考えられる。

5. まとめ

本研究では、複数の城下町を対象に水系の設計論理の解明を行った。その結果、城下町の堀は一定の論理のもとで開削されていると考えることが出来た。今後は更に城下町を調査していくことで、より一層、近世城下町の水系の設計論理を明らかにしていく必要がある。

6. 参考文献

- [1] 阿部貴弘, 篠原修:「近世城下町大坂, 江戸の町人地における城下町設計の論理」, 土木学会論文集 D2, Vol.68, No.1, pp.69-81, 2012
- [2] 玉置豊次郎:「日本都市成立史」, 1974
- [3] 東京帝国大学史料編纂所:「読史備要」, pp475-494, 1935
- [4] 秋田市:「秋田市史第3巻近世通史編」, 2003
- [5] 東京市役所:「東京市史稿皇城編全5巻」, 1911-1918
- [6] 大坂市史編纂委員会:「新修大坂市史第1-5巻」, 1988-1991
- [7] 広島市役所:「広島市史第1巻」, 1972
- [8] 高松市役所:「高松市史」, 1974
- [9] 原田伴彦, 西川幸治:「日本の市街古図西日本編」, 1972
- [10] 原田伴彦, 西川幸治:「日本の市街古図東日本編」, 1973

Table 2. A List of the Features of each Castle Town

名称	国名	城下町建設年	建設大名	石高 (慶長19年)	大名 (慶長19年)	立地	城下町の特徴	
大坂	摂津	天正11年 (1583)	羽柴秀吉	石高不明	豊臣秀頼	大川河口	立地	大坂城下町は多くの水路を持つ城下町である。西下りの地形を持つ城下町内でも微高地に位置し、北と東に河川が存在している。周辺及び南に武家地が広がっており、町人地は西に発展した。
							内濠・外濠	大坂最古の堀川である東横堀川は上部の大川及び西下りの地形に対し垂直に掘られ、大坂の外濠としての機能を持ち、城下の排水も担っていた。
							堀川・水路	大坂は西に城下町を広げ、西横堀川の開削も行われたが、江戸の直轄領となった後は商人のまちとして更に発展し、西横堀川以西には舟運のための水路が多く掘られた。
広島	安藝	天正16年 (1588)	毛利輝元	49万8千2百	福山正則	太田川河口 三角州	立地	広島城下町は複数の河川が流れる三角州に位置し、その中でも中心の比較的広い陸地に位置する城下町である。街道、堀川沿いに町人地が位置し、干拓により城下町は南に拡大していった。
							内濠・外濠	築城材料の運搬のために平田屋川と西堂川が南下りの地形に沿って開削され、築城後は外濠及び舟運路として活用された。城下町内の堀には太田川から外濠を通して水を取り込み各水路内に巡らせていた。
							堀川・水路	平田屋川、西堂川の他にも水路が確認できるがこれらの水路沿いにも町人地が配置されており、用排水だけではなく舟運の役割も持っていたと考えられる。
高松	讃岐	天正16年 (1588)	生駒親正	17万1千	生駒一正	瀬戸内海沿岸	立地	高松城下町は西方面を山に北を海に守られ、城郭が海に隣接した城下町である。町人地は主に街道沿い、海沿岸に配置されている。
							内濠・外濠	海に隣接しているため、内濠外濠はコの字型になっており、中には海水を巡らせている。外濠の内東側に町人地が形成されている。
							堀川・水路	その利用については定かではないが、東に位置する水路から町人地まで水路が引かれている。
江戸	武蔵	天正18年 (1590)	徳川家康	石高不明	徳川秀忠	隅田川河口	立地	江戸城下町は多くの水路を持つ城下町である。元は江戸城の南側に日比谷入り江が存在し、入り江を通じて東京湾に隣接していた。元江戸前島を中心に町人地が発達していった。
							内濠・外濠	外濠は江戸の地形に沿って微低地及び谷地に掘られ、江戸前島の微高地に沿う形で日比谷入り江を埋め残し、外濠は町人地との境界ともなっており、舟運、排水の役割を担っていた。
							堀川・水路	家康入場後に掘られた道三堀川と小名木川は江戸における主に塩の搬入と建設資材の搬入の役割を担っていた。その後も江戸前島の町人地を中心に水路が形成され、舟運も活発に行われていた。
久保田	出羽	慶長7年 (1602)	佐竹義宣	20万5千8百	佐竹義宣	旭川沿岸 内陸	立地	久保田城下町は内陸に位置する城下町である。城郭は山を背にして西に河川が流れ、町人地は河川の反対側に配置されており、城郭と町人地が河川によって分断されている。
							内濠・外濠	城郭と町人地の間を流れる旭川は築城時に流路が変更され、旧旭川は久保田城の内濠として活用された。
							堀川・水路	地形的に比較的無防備な南側には水路が形成され、武家地が配置されている。
松江	出雲	慶長12年 (1607)	堀尾吉晴	24万	堀尾忠晴	宍道湖沿岸	立地	松江城下町は城郭が山や湖に隣接した城下町である。かつて宇賀山という丘陵地があり、それを切り崩した土を用いて築城された。土は他に東に位置する武家地の宅地造成にも持ち入れられたといわれている。町人地は城郭周辺や東側の水路沿いにも確認できるが、多くは南の外濠を境界として南側に多く広がっている。
							内濠・外濠	丘陵地の切り崩しによって内濠が形成されるなど、内濠の開削には地形改変を伴っている。また、北は山や武家地が広がっているためか、外濠はコの字型に開削された。
							堀川・水路	武家地が北と東に造成され、武家地の間に水路が引かれており、その周囲に一部町人地が配置されている。

※表中『城下町建設年』及び『建設大名』は参考文献[2], pp595-600, 『石高』は参考文献[3]を参考, 『城下町の特徴』は参考文献[2]-[10]を参考に作成。